

コンパの終わりの時間が近づくと、稲盛さんは激論を繰り広げた相手のコップにビールを注いで回った。そして、「まあまあ、そう怒るな。お前たちの言い分はよくわかっている。苦勞をかけて申し訳ないな。でも会社の事情も理解してくれよ」と、さっきまで真っ赤な顔で怒っていたのに今度はニコリと笑って、「頑張れよ」と声をかけてくれた。相手は黙って頷いていた。

コンパが終わって、私は稲盛さんと一緒に帰途についた。そのときに稲盛さんはこう言った。「本当に今日は久々に怒った。だが、みんな孫みたいなものだから厳しく言わないとしょうがないな」と。

確かにその時は凄い迫力だった。しかし、そこには、本当の孫に対するような深い愛情があったと思う。彼らも稲盛さんの本気と愛情を感じたに違いない。その後、運航本部長から「ご迷惑をおかけし申し訳ありませんでした。しかし、コンパに参加したメンバーは本当に喜んでいました」と連絡があった。

「これまで経営トップは都合が悪いと担当役員に任せきりで逃げていた。でも、稲盛さんは直接出てきて意見を聞いてくれた。駄目なことは駄目とはっきり言ってくれた」と感激しているというのである。本音で話す、勇気をもって行動する、困難から逃げず真っ正面から取り組むといったことを稲盛さんは常々口にしてはいるが、それを自ら体現された。

また、そこには愛情もあった。その姿を見てパイロットの卵たちも頑張ろうと思ってくれたのである。結局、JALの再建は順調に進み、訓練は再開することができた。稲盛さんは彼らとの約束をきちんと守ったのである。

文中の「稲盛さん」とは、京セラ・第二電電（現KDDI）創業者である。2010年（平成22年）2月、日本航空会長に無報酬で就任する。「JALフィロソフィ」の策定など積極的な社員の意識改革に取り組み、着任の翌期には営業利益1800億円の高収益企業に生まれ変わらせることに成功した。赤字続きだった日本航空を3年足らずで再上場させた。絶対に不可能といわれた奇跡のJAL再建を成し遂げた。

稲盛さんは、リーダー教育として、大反対を押し切って幹部を集めた合宿を行っている。50名ほどの人間が集まり、勉強会を開き、全員がこれからのJALをどうすべきかと、率直に、自由に、本音で語り合った。「JALを再建するためには何が問題なのか」「自分たちはどうすべきか」など、丁々発止の議論を続けた。

偶然にもこの日は稲盛さんの誕生日でもあったが、サプライズでお祝いをしてもらっている。「仲間に入れてもらった」と実感した時でもあったと言っている。

熱い議論は止まず、あっという間に時が過ぎた。50歳前後のJALのエリート幹部が、若者のように熱い議論をしている。そして、ものすごい一体感が生まれている。熱気が充満した一日だった。その中にいて、稲盛さんはJALの再建は成功するだろうという確信を初めてもつことができるようになったそうである。

奇跡のJAL再建物語からは学ぶべき点が多い。学校現場でも生かせることはある。